

訳者あとがき——ブラジル地域研究とフェミニスト人類学の視点から

本書は Debora Diniz, *Zika: Do Sertão Nordestino À Ameaça Global* (2016, *Civilização Brasileira*) の翻訳である。ブラジルの人類学者デボラ・ジニスがポルトガル語で書いた原著は、その後、英語に翻訳され二〇一七年に出版されている。本書はポルトガル語版をベースにしつつ、英語版 *Zika: From the Brazilian Backlands to Global Threat* (2017, translated by Diane Grosklaus Whitty, Zed Books) も参照している。ポルトガル語版と英語版の違いを考慮して下訳担当を決め、第1章と第4章を奥田がポルトガル語版から、その他の章を田口が英語版から翻訳したあと、もう一方の言語版で訳文を確認するというやり方を取った。

ポルトガル語版と英語版は記述が異なる箇所も多々あるため、著者の意向を確認したうえで、日本の読者に読みやすいよう変更を加えている。例えば、英語版では、感染者数や感染国などの諸デ

ータがジニスにより更新されているため、日本語版でも英語版の数値を採用した。そのほか、英語版ではブラジル人以外の読者にもわかりやすいよう説明文が適宜補足されているので日本語版でもそれらを加えている。また、ポルトガル語版では現地に詳しい人にしか伝わらない地名や歴史的な説明等があり、不要と判断した部分は削除した。本書のタイトルも著者の希望をふまえて大幅に変更している。このように、翻訳に際してはジニスに適宜、質問をし、その回答をふまえて加筆修正している。ジニスが本書を執筆していたジカ流行期から日本語版が出版されるまで、数年が経っているため、ポルトガル語版出版以降の経緯を日本語版あとがきに執筆するよう依頼し、快諾していただいた。さらには本書では、カバーや表紙や各章冒頭に、ジニスが撮影した写真が使われている。これらの写真は、日本語版のためにジニスに提供してもらった。ジニスは、北東部の女性たちとのコミュニケーション手段として映像とともに写真を重視してきた。写真によって、読者も登場人物を身近に感じることができるだろう。

翻訳にあたって、岩城知子さん（国立研究開発法人産業技術総合研究所）と石丸香苗さん（福井県立大学）から貴重なご意見をいただいた。浜田明範さん（関西大学）は訳文全体に目を通し、医療人類学的な見地からも丁寧にコメントをくださった。グスターボ・メイレルス（Gustavo Maites）さん（神田外語大学）には、ポルトガル語の訳語や人名の表記方法などについて、ご教示いただいた。記して感謝する。また当然ながら、本書の誤訳や不備があれば、それは訳者の責任である。

ブラジリア大学法学部の准教授であるジニスは、生命倫理を専門とする人類学者である。これまで刑務所や精神病院などで調査研究を行い、製作した八本のドキュメンタリー映画や発表した研究成果により数々の賞を受賞している。一九九九年には、女性やマイノリティの人権保護を目的とした団体アニス（Anis: Instituto de Bioética/Institute for Bioethics 生命倫理のための研究所）を設立し、活動を行っている。

本書は、二〇一四年にブラジルで「謎の病い」を引き起こし、二〇一五年に原因となるウイルスが特定されたジカを追うモノグラフである。二〇一六年二月には、WHOが妊娠中のジカ感染と胎児の小頭症との関連を発表した。このように出来事が進むただなかで、ジニスは、二〇一六年二月から六月にブラジル北東部を中心とした調査を行った。調査開始二カ月後には、その成果をまずは映画『ジカ熱』としてYouTubeで発表し、七月には本書の原稿を出版社に送り、八月にはジカに感染した妊婦の中絶を刑罰の対象から外すための訴訟を起こしている。人類学者が行う民族誌的な調査は長期のフィールドワークを伴い、執筆にも時間がかかることが一般的なので、ジニスの速やかな行動力には驚かされる。それでいてジニスは、ジカを経験した女性や医師の声に注意深く耳を傾け、現場で何が起きていたのかを鮮やかに描き出している。ここには、ジニスがこれまで培ってきた人類学者としての能力が反映されている。本書は、現在進行形の（それゆえに記述や評価や介入が困難な）公共的な問題に、人類学がどのようにかかわることができるのかを示す、一つの

モデルとなっている。

グローバル化の進展による人の移動の増加や、地球温暖化を含む気候変動により、日本においてもさまざまな感染症の拡大が懸念されている。二〇一四年八月、東京の代々木公園を中心としたデング熱の流行は記憶に新しい。これは太平洋戦争中の移動に伴う流行以来、六十九年ぶりの国内感染だとされる。ブラジルへのジカ上陸については、二〇一四年FIFAワールドカップ（および二〇一三年コンフェデレーションズカップ）を含む、国際的なスポーツ大会との関連が疑われている。ジニスは、二〇一六年夏のリオオリンピック・パラリンピック開催のリスクについても訴えていた。その警告は、二〇二〇年夏に東京オリンピック・パラリンピックを開催予定の日本にとっても看過できないものである。

このように、本書がポルトガル語と英語で迅速に発表され、今回日本語訳が出版できたことには、時事的な問題提起としての意義があるといえよう。そのうえで本書には、個別の事例報告に留まらない複数の論点が含まれている。以下では、本書の魅力をさらに深く味わってもらうために、ブラジル地域研究とフェミニスト人類学の立場から、いくつかの視点を提示する。

ブラジルにおける格差と北東部の窮状

まずは本書の背景となる、ブラジルにおける社会問題をみていこう。ブラジルは世界有数の格差社会であり、北東部内陸部はブラジルの貧しさを象徴する地域として知られている。豊かな南部・

南東部や都市部に比べて、所得水準や教育水準、インフラ、医療システムなど、あらゆる点で課題が山積みの地域といえる。また、北東部の州内でも格差がある。本書でも述べられていたように、州都と内陸部とは、所得や教育などのすべての水準が異なっている。北東部の各州都は沿岸部にあり、ポルトガル植民地時代から栄えてきた場所で、美しいビーチで知られるリゾート地でもあり、古い教会や情緒ある街並みが人気の観光地である。しかしそこから少し内陸にはいれば、違った風景が広がっている。州都からの舗装された道路は途切れ、バイクタクシーが走ると砂ぼこりが立ち込める砂利道へと変わる。道行く人びとの服装は簡素で、足元はたいはいビーチサンダルだ。小さな集落では電気や水道が整備されていない場所もあり、台所では水がめやかまどが使われている。それより少し人口の多い町では、老齢年金や家族手当などの支給日には町の中心にある銀行に列ができる。主食を自給自足しながら、現金収入の面では公的扶助に頼る世帯も多い。テレビなどを通じて「豊かな南部・南東部」との格差を知り貧しさを認めつつも、「ここはみんなが顔見知り」と、地域のつながりに重きを置いている。一方で、就業機会や教育機会の面で「ここには未来がない」と感じた人びとは、都市部へとよりよい生活を求めて出ていく。北東部は、都市部の労働力の供給地でもある。そこが、本書の舞台である。

ジニスが本書で描いたジカ熱流行をめぐる出来事から浮かび上がったのは、ブラジルのこうした地域格差である。豊かな南部・南東部は貧しい北部・北東部と著しい経済格差があるだけでなく、それに伴う政治力や発言力の不均衡がある。ジカ熱の流行中心地が十分にインフラ整備がなされて

いない北東部であったことは偶然ではないし、北東部内陸部の医師や研究者の言葉が軽視されてきたのも、こうした社会の不平等に起因している。

「リプロダクティブ・ヘルス」をめぐる論争

ジカ熱はブラジル全体に等しく影響を与えたのではなく、既存の社会的な格差に沿う形で、つまりもともと貧しい人びと・地域に影響を及ぼしていった。ジニスはこの事実をそのまま伝えるため、リプロダクティブ・ヘルスという別の論争の種を本書に含めることを避けた。英語版では「中絶 (abortion)」と翻訳されている箇所があるものの、元のポルトガル語版では「中絶 (aborto)」を極力使わないように書いている。リプロダクティブ・ヘルスとか女性たちの選択の自由といった表現が使われているために、日本の読者にとって多少わかりづらい点もある。それはジニスだが、ブラジルの読者が本書を中絶論争の一部として読むのではなく、単なるジカの物語として受け止めることを望んでいたためだ。こうした配慮にもかかわらず、実際にはジニスは中絶という大きな論争の渦中に身を置くことになった。本書がブラジルで単に感染症の話として読まれることは難しいだろうし、ジニス自身もそう認識している。

ブラジルをはじめとするいくつかの国々では、中絶論争はときに暴力的な行為へと結びつく。とくにカトリックやプロテスタントの教義を重視する人びとは、中絶に否定的である。二〇一八年の意識調査では、ブラジル人の六割弱が中絶は刑罰の対象であるべきと答えている。中絶はブラジル

現行刑法第一二四条、一二六条で犯罪行為であると定められており、中絶した女性とそれに関与した人は刑罰の対象となる。中絶を行っても刑罰の対象とならないケースを定めた一二八条では、強姦による妊娠、妊娠継続によって母体に危険がある場合を挙げている。この条項には、二〇一二年の違憲審査第五十四号 (ADPF 54) を経て、胎児が無脳症であるケースも刑罰対象の除外項目として加えられた。しかしこれに関しても、「中絶」ではなく「出産の早期化」「妊娠の中断」「治療としての中絶」といった言葉で説明されることが多い。

中絶を刑罰の対象から外すことを主張する人びと (プロチョイス) は、刑罰化は中絶を減らすことには役立つしないと主張する。実際、年間五十万件から一〇〇万件の中絶がブラジルで行われており、四十歳以上のブラジル人女性の五人に一人は中絶を経験しているともいわれる。経済的に余裕のある人びとは国内外で衛生的で安全な手術を受けられるのに対して、貧しい人びとは安価で不衛生、安全が保障されていない手術や薬に頼らざるを得ず、現状では、貧しい女性のみが不利益を被っているという。一方のプロライフは、胎児の命や権利を重視する人びとである。人間の生死は、神の手にゆだねるものであり、胎児の命を奪う権限は母親にもないと考える。なかには、強姦による妊娠であっても中絶すべきでないとの意見もあり、実際にラテンアメリカのいくつかの国では禁止されている。アメリカ合衆国では、中絶を実施するクリニックの医師が一部の強硬なプロライフによって殺害される事件が起きているが、ブラジルでもプロチョイスへの殺害予告が相次いでいる。

ジニスは今やプロチョイスの論客の中心人物の一人であり、関連記事をマスメディアなどで随時発信している。ジニスが創設メンバーであるアニスの活動によって一二八条に無脳症胎児のケースが加えられたほか、現在進行中の違憲審査第四四二号（妊娠十二週までの中絶の非刑罰化／ADPF42）もアニスによって提訴されたものである。これらの公聴会ではジニスもプロチョイスの代表の一人として意見陳述を行った。プロライフにとつての論敵となったジニスは脅迫を受け、大学教員としての仕事を休職し、海外へと生活の拠点を移すこととなった。

プロチョイス？——個人の選択とフェミニズム

上述のように、本書でジニスは、ジカを経験した人びとの声を伝えることを最重視し、焦点を絞っている。そのため、人類学者としての理論的な議論は控えているようにみえる。ただし、本書の記述ににじみ出ている主張は、近年のフェミニスト人類学の一潮流と呼応するものである。そこで以下では、本書の問題提起を人類学的な視点から検討してみたい。

国家や専門家や宗教・社会規範に強制されることなく、「自分のことは自分で決める」という選択の自由は、女性のヘルスケアにとつて重要な課題であった。そしてジニスは、女性の権利のために勇敢に行動する知識人である。しかし本書の魅力は、アクティヴィストとしてのジニスの主張（それは尊敬に値するものだが）を超えた民族的な記述にある。著者の「あとがき」にもあるように、本書に登場する女性たちの語り口は「両義」的（本書二二七頁）で、かならずしも著者の主張に一致するものではない。

たとえば本書には、産後すぐに亡くなった息子ギリェルミの遺体を「科学に捧げた」若い母親のジェシカが、「世界中の母親たちが答えを求めているのに、自分勝手なことはしたくなかった」（本書九八頁）と述べる印象的なシーンがある。ジニスの撮影した映画『ジカ熱』において、ジェシカは献体を決めた理由をより詳しく語っている（Diniz 2016）。ジェシカは、集中治療室で、亡くなったばかりでまだ温かい息子の遺体を抱き、キスして、子守唄を歌いながら、決断をした。そして医師に、この子の頭を切り開いたり、体から必要なものを取り出したり、なんでもしてくだささい、と告げた。「母として、それがこの子の使命なら、果たしてもらいたい。この世に生まれて、こうした経験に耐えることが彼の使命なら、私は許可を与えます」。続けてジェシカは、あまりに多くの答えのない問いを抱えている世界中のほかの母親たちを見捨てるような、自分勝手なことはしたくなかった、と話した。

ジェシカの「決断」は、彼女個人の自由な選択であるというよりは、息子の「使命（ミッシェン）」を妨げないためのカトリック教徒としての行為であり、また自分勝手なことはせず、世界の「母親たち」という集合体のためを思った行為であった（そもそも、彼女が自由に選べるなら、健康な息子を育てたかっただろう）。すなわちここからは、個人をベースにしたリベリズムを超えた、フェミニズム的な連帯を読み取ることができる。

フェミニズム運動に対しては、女性の権利を訴えるよりも、個人の「人権」を尊重し、平等・公

平を目指せばいいのではないかという一般的な反論がある。これは、米国で生じたアフリカ系アメリカ人に対する構造的な暴力に反対する *Black Lives Matter* (黒人の命は大切だ) 運動への反発として、*All Lives Matter* (誰の命も大切だ) というスローガンが掲げられたことにも似ている。いずれも、中立性や普遍性を掲げて、運動の党派性を批判する立場である。しかし、一見耳当たりの良い中立性や普遍性を主張することは、差別や不平等、差異のある現実を直視せず、現状に追随することを意味する。

フェミニスト人類学は、中立的な普遍性ではなく、偏りや党派性、そして具体性を重視する方向性を示してきた(ハラウェイ二〇〇〇、ストラザン二〇一五、*Moi 2008*、モル二〇一六)。同様に本書は、ジカの脅威は「グローバル(世界的、包括的、全体的)」なもの、すなわち「あらゆる国籍、性別、年齢層の人びとのあいだに等しく降りかかる」ものではなく、妊娠中あるいは妊娠を望んでいる女性たち、なかでも「南」の貧しい女性たちにとっての脅威なのだと繰り返し訴えることで、具体性への注目を促している。ヘルスケアの文脈で考えると明らかだが、グローバルなレベルで何らかの一般的な原則を当てはめることは不可能であり効果的でもない。個々の疾病や障害の性質、その原因や感染経路、患者の症状や病歴、さらには社会・経済・法的状況(サポートしてくれる人はいるか、お金は払えるのか、法律はそれを認めているのか等)を考慮しながら、現場での具体的な対応を模索する必要がある。

このように、フェミニスト人類学の主張には、一つの基準を当てはめず、個別具体的な詳細を考えるという意味での(女性運動に留まらない)「普遍性」がある。さらに、属性や差異、党派性を重視するとはいっても、それは人種、性別、階級などに固定されるものではない。人は状況によってさまざまな集合体(たとえば同じ疾病を持つ人たち、月経がある人たち、保険に加入している人たち)の一部になりうるし、さまざまなカテゴリー化/個人化の可能性がある。ジェシカは、カトリックの一員として息子の使命を受け入れることができたし、見たこともない世界中の「母」たちの集合体を想って献体を決断することができた。このジェシカの決意と語りは、(中絶の脱犯罪化を含む)フェミニストとしてのジニスの運動に活力を与えている。本書は、矛盾を含みながら進んでいくフェミニズム運動の民族誌でもある。

プロライフ?——多種とともに生き、死ぬこと

「プロライフ」という言葉は、中絶の是非という論争を超えて、人間と非人間の絡み合いからなる政治につながっていく。フェミニスト人類学と科学技術論(STS)を牽引してきたダナ・ハラウェイは、人口増加や環境破壊といった地球規模の問題に取り組むために、人間中心で出生主義的な親族観を乗り越えようと訴える。そのため彼女は、*Make Kin Not Babies!*(子どもではなく親族を作ろう)というスローガンのもと、これまでとは異なる連帯の可能性を呼びかけている。彼女の主張から多種間の生について考えるために、ハトの物語を紹介しよう。

オーストラリア、メルボルンのハトは、ヨーロッパ人の入植とともにアボリジニの人びとの土地

へ持ち込まれ、新しい生態系のなかで繁殖していった。一九九〇年代、かつてのアポリジニの領土にある公園に、市行政によってハト小屋が作られた。これは、害鳥としてのハトを市街地から遠ざけ、出生制限（孵化制限）を行うための装置である。小屋には、ハトが卵を産むための二百の巣箱がある。公園では、小屋の周りでハトに餌をやることは奨励されている。招き寄せられたハトが卵を産んだのち、人間が人工の卵に置き換える。ハトを小屋に集め、偽の卵を温めながら留まらせることで、人間はハトの糞を効率的に集めて堆肥化する計画を進めている。

このハト小屋は「プロライフ」ではない。ハラウェイの見解では、動物と人間の相互生成は、「アメリカ的な意味での恐ろしいプロライフのプロジェクト」とは相いれないものである（胎児の命を名目として、ジニスのみならず、彼女が教鞭をとるブラジリア大学の学生を含めた大量殺人を行うという脅迫が「プロライフ」派からなされていることは、その恐ろしさの一端を示している）。メルボルのハト小屋は、過去の侵略や環境破壊をなかつたことにはできないし、それ自体無害ではない。しかし、異なる種類の生き物がともに生きて死ぬこと、育てて殺すことに真剣に向き合い、「なにかやっつけていく」ための小さな糸口を示していると、ハラウェイは考える(Haraway 2016: 26-29)。

多種間の生と死は、ジカのような感染症にとっても核心となる。本書でも、蚊の排除と女性へのケアのどちらを優先すべきかという問題が示唆されている。ジカウイルスをもつとも効率的に感染させる媒体は、ネツタイシマカである。ネツタイシマカは、人間の血を糧とするが、行動が目立たず、刺された箇所もほとんど気づかれない。そのためブラジルでは、長年「家族の一員」であった。

「ネツタイシマカはブラジルの家族の一員なので、刺されても誰も気にしない。蚊もほかの家族みんなと一緒に食事を楽しむし、みんなと同じ寝室で寝るのを好む」（本書六〇―六一頁）。家族の一員だとしても、別の（人間の）家族の健康を守るためには殺さなければならぬ。ブラジルはネツタイシマカの排除に二度成功したものの、蚊は再び舞い戻ってきている。蚊の感染能力を失わせたり、撲滅するためのさまざまな努力は継続中である。ただし、ジニスが訴えるように、特効薬に期待するだけでなく、いまだ蚊が「家族の一員」である状況のなかで、疾病や障害のある女性や子どもたちにどのようなケアを提供できるのかという課題に取り組む必要がある。

感染症とリベラリズム

人間と人間以外がどのようにともに生きて、病んで、死んでいくのか。本書が投げかけるのは、リベラルな個人を超えて考えるべき問いである。実際に、私たちはほとんどは、健康で自律した個人ではなく、なんらかの形でケアを必要とし、相互に依存しているのだから。

本書は、ジカという感染症を追いながら、一貫して現場を重視する立場で書かれている。グローバルな（先進国中心の）科学ではなく（ブラジルのような）周縁国における科学実践に、ブラジル南部のトップ研究機関の実験室における科学者よりも北東部で患者に向き合う臨床医に、専門家や医師の見解よりも疾病にかかった患者の語り之光が当てられている。こうしてジニスは、現代ブラジルにおける構造的な暴力を浮き彫りにすることに成功している。さらには、一見「中心」と「周

縁、「科学者」と「人びと」という二項対立を前提として議論が進んでいくように見える一方で、事例のなかにはその枠組みに収まらない現実が姿をみせる。

たとえばジニスは、ジカウイルスの解明に貢献した女性たちの物語を描くことで、彼女たちが単なる「羊水」や「血液」に還元されてしまわないよう、個人の尊厳の回復を目指す。ジェシカやコンセイサンが羊水を提供したことで、またアントニオ医師が患者の血液サンプルを集めてグビオ教授に渡したことで、疾病の原因は明らかになっていったが、ここでは身体の一部は個人と切り離された物質であった。ジニスが、患者の症状を撮影した身体部位の画像を、教会への「奉納物」にたとえていることは印象的である。個人の名前や物語が消されることで、個人の一部を構成する物質や部位は個人を超えて、集合体を表象することになる。ここには、中心と周縁や科学者と人びとといった社会的な区分とは異なる、身体物質と集合体をめぐるカテゴリー化が示されている。

感染症と個人をめぐる葛藤について、医療人類学者・STS研究者でありフェミニストを自認するアネマリー・モルは、「細菌とリベラリズムは波長が合わない」(Moi 2008: 79)と表現している。特定の人口集団に向けた公衆衛生を向上させることは、個人を対象としたケアとは性質が異なる。十九世紀のヨーロッパで都市が形成されたさい、政府は個人を啓蒙するのではなく、下水道を整備し、食料供給の規制を作ること、感染症から人口を守ることができた。一方で、疾病のある人びとに寄り添い、不安を取り除くことは、患者個人のQOL(生活の質)の改善には大いに役立っても、(たとえば平均寿命といった)公衆衛生上の指針には反映されない(Moi 2008)。ジニスは、

ジカの物語を通して、公衆衛生の改善(蚊の排除)と女性への支援、集合体へのケアと個人へのケアをめぐる矛盾や葛藤を可視化している。

本書は、ブラジルにおける感染症という個別のケースを通して、広くケアや連帯を想像しなおすための人類学的な「フェミニズム」の物語でもある。物語を通して、私たちは現実を把握できるようになり、さらにはより良い現実を作り出すことができる。ジニスが紡いだブラジル北東部の医師と女性たちの語り、日本において多くの語りの共有につながっていくことを願っている。

二〇一九年九月

奥田若菜

田口陽子

参考文献

- ハラウエイ、ダナ二〇〇〇『猿と女とサイボーグ——自然の再発見』高橋さきの訳、青土社。
Haraway, Donna. 2016. *Staying with the Trouble: Making Kin in the Chthulucene*. Duke University Press.
Moi, Annemarie. 2008. *The Logic of Care: Health and the Problem of Patient Choice*. Routledge.
モル、アネマリー二〇一六『多としての身体——医療実践における存在論』浜田明範・田口陽子訳、水声社。
ストラザン、マリリン二〇一五『部分的つながり』大杉高司・浜田明範・田口陽子・丹羽充・里見龍樹訳、水声社。